

とあるメイドに恋した
元吸血鬼

赤ろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、とある元吸血鬼が新たな世界で出会ったメイドに恋する物語である。
処女作です。

9月12日に設定等の大幅な変更をしました。

目次

プロローグ	1
第1話 出会い	5
第2話 運命	9
第3話 組み手	13
第4話 本の虫と使い魔のち時々狂気	17
第5話 仲直り	21
第6話 止まった世界の中で	24
第7話 波紋疾走	30

プロローグ

1987年カイロ

D I O 「こ、このD I Oがああああああああああ！」

条太郎 「てめーの敗因は… たったひとつだけ… D I O… たったひとつの単純な

答えだ…」

条太郎 『てめーは俺を怒らせた』

そんな条太郎の言葉が意識が無くなりそうなD I Oには聞こえたそしてD I Oは思った

D I O (そうか私は間違えたのだ… 運命と言う最大の選択を仕方ないだがこれでまた貴様に会えるなジョジョ…)

?? 「ディオ、君にはまだ生きていて欲しいそして生きて僕と会おうディオ」

D I O 「な、お前は…」

そこでD I Oの意識は途絶えた

そしてD I Oが再び目を覚ました時そこは…

D I O 「ぬう： 此処は一体どこなのだ？カイロではないな」

D I O が目覚めた場所は森だった

D I O 「何だ視線が低く感じるそれに日光が当たっても何ともない……！ま、まさか」

吸血鬼？確認中……

D I O 「まさかな……このD I O が人間に戻っているとわ……しかもこの肉体ジョジョによつて消された肉体だ……何故元にそれに世界も上手く扱えない仕方ない今はこの世界の事を調べねば。」

?? 「お前は食べられる人類なのかー？」

振り向くとそこには金髪の少女がいた

D I O 「貴様何者だ？」

?? 「質問に質問で返すとテスト0点なの知ってるかー間抜けなのかー？」

D I O 「すまない、この世界の事について教えてくれないかな？」

?? 「お前外人人なのかーじゃあ食べていいのだー」

その瞬間少女の気配が変わったそして少女が……

D I O 「な、浮いただと！」

?? 「それじゃあ頂きますなのだー(○、▽、○)」

すると少女は謎の光弾を放った

D I O 「スタンドか？ならばゆけ世界！無駄無駄無駄無駄ああ！」

D I O は世界によって光弾を弾いた

?? 「なんだー？弾幕がいきなり弾かれたのだー」

D I O 「こいつスタンド使いではないのかならば何だあの弾は？だがスタンドが見えなければ勝機はあるゆけ世界」

そしてD I O は世界のラツシユを軽く放った

D I O 「無駄無駄無駄無駄あああああ！」

?? 「うっうわー（ピチューン）」

D I O 「よし倒したかだが気絶したか起きたらこの世界について聞きたい事が山ほどある仕方ない待つか……」

元吸血鬼待機中……

?? 「ハッ……」

D I O 「目が覚めたか」

?? 「何故殺さなかったのだー？」

D I O 「貴様には聞きたい事が山ほど有るからな」

?? 「ルーミア……」
「よ」

D I O 「何だ？」

?? 「私はルーミアなのだー貴様じゃあないのだー」
D I O 「私はD I Oだ……」

第1話 出会い

ルーミア「D I O かわかったのーだー」

D I O 「それではこの世界について教えてもらおうか」

ルーミア「それじゃあ言うのーだー」

キングクリムゾン！

D I O 「なるほどつまりこの世界は幻想郷そしてこのD I O は幻想入りしたと言う訳かそして幻想入りした人間を此処では外来人と呼ぶのか」

ルーミア「そうなるのーだー」

D I O 「本来なら博霊神社と言う場所に行くべきだろうがこのD I O は元の世界に戻るつもりはないゆえにいく必要はない…」

ルーミア「そーなのーかー」

D I O 「ルーミア、此処から一番近い建物は何処だ？」

ルーミア「それなら紅魔館なのーだー」

D I O 「紅魔館？ 確か主は吸血鬼だと言っていたな名前は確か…」

ルーミア「そーなのーだー」

D I O 「ルーミア案内を頼む」

ルーミア 「大丈夫なのだけど殺されても知らないのだ」

D I O 「このデイトは簡単には殺られないさ」

ルーミア 「こつちなのだ」

青年？ 少女移動中……

ルーミア 「此処なのだ」

D I O 「ルーミア助かったぞじゃあな」

ルーミア 「バイバイなのだ」

D I O 「赤いな…… 此処の主のセンスを疑うな取り敢えず行くとするか」

D I O が門の前に行くところにはチャイナドレスのような服を着た女性がいた

D I O 「門番か…… 声を掛けて見るか…… すまないが？」

門番 「(ー・ー) z z z ……」

D I O 「寝ているのかこれでは門番失格だなペットショップの方がよっぽど良い」

D I O は門番をスルーした……

そんな様子見て微笑む者が一人

?? 「フフ……」

?? 「お嬢様、どうなさいましたか？」

?? 「咲夜、お客様よそれと美鈴はお置きね」

咲夜 「畏まりました、それとお客様はどうしますか？」

?? 「此処へ」

咲夜 「ハッ」

D I O 「中まで赤いのかさつて主を探るか… う、動けんこれはまさか？」

灰色の世界で動く者が只一人服装からしてメイドだろうか？その女性はディオの前に来て止まると世界に色が戻った

咲夜 「お客様こんにちは、紅魔館のメイド長十六夜咲夜と申します。」

D I O 「D I Oと言う」

咲夜 「それでは、ディオ様お嬢様がお待ちしております。」

D I O 「うむ…。」

男女移動中…

咲夜 「着きました。」

D I O 「ご苦労」

D I O が扉を開けるとそこには

?? 「いらつしやいあなたが元吸血鬼D I Oね」

ディオ 「そう言う君はレミリア・スカーレットだろう」

この時紅い悪魔と言われる吸血鬼と邪悪の化身と言われた元吸血鬼が対面したの
だった。

第2話 運命

レミリア「それでは、D I O 貴方に一つ聞きたい事が有るの…」

D I O「ほう…なんだ？」

レミリア「貴方、此処に住まない？」

D I O「何故…？ そうなるのだ？」

レミリア「そうねえしいて言うなら貴方が面白そうだからかしらね…」

D I O「その程度の理由でこのD I Oに住めと言うのか？ カリスマが聞いて呆れるなそんなのまるで子供の我儘だな…」

咲夜「つ、貴様！」

レミリア「咲夜、辞めなさい… それと説明が足りなかったわね、正確に言うと貴方の運命が面白いのよ…」

D I O「このデイオの運命だとお君のような少女にこのD I Oの運命が分かると言うかい？」

レミリア「ええ、分かるわよまあ正しくは見る事が出来るだけだね」

D I O「なるほど、それが君の能力か…」

レミリア「そうよそれが私の能力《運命を操る程度の能力》よ」

DIO「だがそれだけでこのディオを面白いと？」

レミリア「そうね特に貴方と友人のジョージ……」

その瞬間部屋の空気が変わった……

DIO「おい、貴様その名を軽々しく口にするんじゃないそれは、我友対する冒瀆として受けとるぞ？」

咲夜（凄まじい殺気これはまるでお嬢様の……この男一体？）

レミリア「それが素ね、それと中々の殺気ね流石は、元吸血鬼かしらね？」

DIO「ふん、それすら見抜くとは、面倒な能力だな」

咲夜「お嬢様申し訳ありませんがよろしいでしょうか？」

レミリア「良いわよ咲夜、貴方も構わないわね？」

DIO「構わん」

咲夜「お嬢様、ディオ様ありがとうございますとございます。それでは、お聞きしますがディオ様貴方は元吸血鬼とおっしゃいましたが、今の貴方は何なのですか？」

DIO「仕方がない話してやろう……」

???「キングダムゾーン！過程を飛ばし結果だけのこる……」

レミリア「なるほどね、つまり貴方は一度死んだと？」

D I O 「正確に言えば違うがな、と言うか貴様は見たのではなかったのか？」

レミリア 「普通ならそうだけど、貴方は別ね何故か所々見えない運命があつわ……」

D I O 「なるほど、貴様の能力も万能では、ないか……」

レミリア 「認めたく無いけど、そう言う事ね…… 因みにさっきの答えだけどうかしら？」

D I O 「そうだな、この館に住むことでこのD I Oでなんのメリットがあるんだ？」

レミリア 「そうねまず、この館の一員として幻想郷である程度顔が利くようになるわ、それに衣食住はもちろんこの館の者全員の能力も分かるは、後個々の図書館を自由に使っているわ」

D I O 「なるほど興味深いな…… (此処に入れば幻想郷の情報が集まるのかならばそのうち奴にも……) 良からうこのD I Oこの紅魔館に住もう」

レミリア 「良かったは、もう既に部屋は用意してあるわ、それと教えておくわねさつきも言ったけど、私の能力は《運命を操る程度の能力》だけどその咲夜は……」

咲夜 「初めまして、デイト様十六夜咲夜と申します。私の能力は……」

D I O 「《時間を止める程度の能力》だろう？」

咲夜&レミ 「何故！知っているのですか（かしら）？」

D I O 「私の能力のお陰だよ」

レミリア「でその能力とは？」

DIO「そうだな、強いて言うなら………
な………」

《世界（守護霊）を操る程度の能力》だ

第3話 組み手

レミリア「成る程《世界を操る程度の能力》ねえってまるつきりチート能力じゃない!?」

D I O 「何か勘違いしている用だか、そこまで驚くことか?」

レミリア「じゃあその《世界を操る程度の能力》とやらを見せて貰おうじゃない」

D I O 「ほほう、どうやって見るつもりだ?」

レミリア「家の門番と組み手をしてもらうわ」

咲夜「お嬢様それは、美鈴のことですか?」

レミリア「ええそうよ、逆にそれ以外あるかしら?」

咲夜「確かにそうですが、彼は人間です、美鈴に勝てるかどうか?」

D I O (プチ) 咲夜と言ったか、私は確かに人間だ、だがなこのD I Oをそんじよこれらの人間と同じにされては、堪らんぞ... (何故だ?この女に何か言われると無性に腹立たしい)

咲夜「それは、申し訳ありませんわD I O様(何故かしらね?この男のこと弄りたくなっちゃう)」

レミリア「じゃあ決まりね、それじゃあ外に行きましよう今日の夜空は満月よ」

D I O 「良かろう」

咲夜「畏まりました。」

美鈴「スヤー（ω、ω）」

咲夜「美鈴起きなさい、フツ」

美鈴「グフツ!?咲夜さん寝てたからって、いきなりボディーブローはないでしょ?」

咲夜「居眠りしてる貴方が悪いのよ」

レミリア「美鈴貴方には、これから組み手をしてもらうわ」

美鈴「畏まりました。お嬢様因みに相手は誰が?」

D I O 「私だ」

美鈴「あ、どうもってどちら様ですか?」

レミリア「彼は、今日から此処に住むようになった…」

D I O 「D I Oだ」

美鈴「分かりました。それではD I Oさんよろしくお願いします。」

D I O 「うむ、それでは全力でいいのだなあ?」

美鈴「いいですよ、人間の貴方にどこまで出来るか分かりませんが?」

咲夜「それでは、私が審判をそれでは…スタート!!」

そこで両者は構えをとった……

D I O 「その構え、中国拳法か？」

美鈴 「ええ、その様なものですね」

D I O (美鈴と言ったかこの女と言い咲夜と言いこのD I Oを甘く見よって、世界はまだ使わんが、見せてやる貧民街ボクシングを元に改良を加えたこのD I Oの我流ボクシングを)

美鈴 (あの構えとステップ確か……ボクシングと言った外のスポーツでしたか?)

ディオ 「それでは、行くぞ……フツ」

美鈴 「なっ! (は、速い)」

そこからD I Oの猛攻が始まった、D I Oの変則的なステップそしてそこから繰り出されるパンチは、簡単に言うなら最凶、元来のボクシングと違い勝つ為なら手段を選ばない攻撃だが……美鈴も負けては居ないその攻撃の殆どを捌いているだがD I Oの攻撃はその隙間をのがさないそしてD I O渾身の一撃が美鈴のこめかみにヒット

D I O (そして、親指を立てこのまま殴り抜ける!)

美鈴 「痛つ……D I Oさんそれ私じやなきや目が潰れますよ?」

D I O 「ほほうあれを受けて平気か、流星は妖怪だな」

美鈴 「では次は、こちらから」

美鈴の攻撃D I Oは、ステップで交わすが次の瞬間美鈴の寸勁からの双纏手のコンボが決まった……

D I O 「ぬぐっ！」

美鈴 「これで終わりです。」

D I O 「仕方ない貴様には、このD I Oの全力を見せてやろう、世界！」

美鈴 「テイオさんの背後に何か現れましたね？」

D I O 「成る程貴様は感知できるのか？だがな貴様は既に負けている」

美鈴 「何を、グフ!？」

D I O 「これで終わりだ……」

美鈴の腹には既に世界の拳が叩き込まれていた……

美鈴 「速過ぎる見えて居ないとは言え感知が間に合わないなんて……」

そこで美鈴の意識は闇へと沈んだ……

c
o
n
t
i
n
u
e
……

t
o
b
e

第4話 本の虫と使い魔のち時々狂気

美鈴との組手後…… D I Oは、レミリアに言われ紅魔館の住人に自己紹介のため地下図書館に来ていたはずなのだが……

D I O「……………ペラ……………ペラ」

D I Oは、読書をしていた……

??「あの一、どちら様でしょうか？」

D I O「D I Oだ、今日から此処に住む事となった。」

??「へーそうなんですねぇ…… って、ええ!？」

デイオ「おい貴様、騒がしいぞ？」

??「そもそもD I Oさんは、何故此処で本を呼んでいるんですか！それと私には、こあとと言うちゃんとした名前があります!!」

D I O「ほほうでは、こあここの管理者のところに来て行け（コイツが使い魔か……………）」

こあ「何故ですか？」

D I O「構わん、行け……………」

こあ「分かりました……（何なのこの男の色気）」

そしてD I Oがこあに案内されて着いて目にしたのは、机に積まれた本の山だった
D I O「……」

??「へえ、貴方がレミイの言っていた元吸血鬼さんね」

しばらくすると本の山の中から声がした

D I O「貴様が、ここの管理者のパチュリー・ノーレッジだな？」

パチエ「そうよ、元吸血鬼さん…… ケホケホ」

D I O「ディオ・ブランドーだ。（本の虫だな）」

パチエ「貴方今、失礼な事考えなかつた？」

D I O「ふん、なんの事だか……」

パチエ「まあ、今日からよろしくねディオ、それと此処の本は、読んでも良いわよ、ちやんと返すなら貸し出しもするわ…… って言っても勝手に読んでるようね」

D I O「ああ…… 失礼、読書は好きなものでね」

パチエ「それとさつきあつたと思うけど…… この子は、私の使い魔のこあよ……」

こあ「よろしく願います。」

D I O「なるほど、理解したで…… その貴様、見ているな！」

??「へえ貴方私に気付くなんて面白そうね……」

パチエ「フラン、貴方何時の間に？」

フラン「パチユリー、今さっきだよ……そしたら知らない人が居たから見てたのそれに……」

パチユリー「それに？」

フラン「貴方、良いニオイがする、私達吸血鬼が大好きな、血のニオイが……」

その瞬間フランと名乗る少女が襲いかかって来た

D I O「くっ、行け世界」

世界「無駄ぁ」

フラン「かはぁ！いい……楽しいよ……もつともつと私を楽しませてよおおお！」

パチエ「気を付けてその子は狂気に取り憑かれているの！」

ディオ「ふん、その程度が狂気だとお？笑わせてくれるこの程度このディオにとって

ガキの癩癩にすぎん！」

フラン「ガキの癩癩……？貴方もお姉さまと同じ事を言うのね……」

数百年前……

レミ「貴方程度、私からしたら只の癩癩を起こした子供よ……」

フラン「ねえお姉さま私は遊んでるだけなのに何で、そんな酷い事言うの？（ねえ何

で……何で……何で……私が嫌いなのか？そうなの？だから閉じ込めるの？出してよ

お姉さま出してよ…… そうか私の事嫌いになったんだ…… 憎い…… 殺してやる……
クロス…… クロスウウウ！」

フラン「お姉さまと同じオモチャなんていらぬ…… 壊してあげる……」
DIO「やってみろ！このDIOに対して！」

o n t i n u e ……

t o b e c

第5話 仲直り

レミリア「この魔力は、まさかフラン！でもどうやって外へ？それにこれは戦っている？誰と？まさかDIOと……フランが危ない！！」

その頃地下図書館では……

フラン「死んじやえ 禁忌 「カゴメカゴメ」！」

DIO「フツ……遅いぞ!!そんなハエの止まるようなのろつちい攻撃でこのDIOが倒せるものか!!（これがスペルカードか……面白い）」

フラン「くらえ!!秘弾「そして誰もいなくなるか?」QED「495年の波紋」！」

DIO「行け!世界、無駄無駄無駄ああ!!」

フラン「その守護霊見たいなの面白そうね……じゃあフランも本気で殺つてあげる…… 禁忌「フォーオブアカインド」禁忌「レーヴァテイン」!!」

DIO「くつちよこぎいなあ!!良かる貴様には、我が世界の真の能力を見せてくれよう「ザ・ワールド」時よ止まれえ!!」

ブォオン……

咲夜「これは、時間が止まって！」

D I O 「これで終わりだ…… 無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ああああああ!!そして時は動き出す……」

スウウ……

フラン 「!?何が……」

D I O 「ほほう、まだ息があるか?ならば」

レミリア 「待ちなさい……」

フラン 「お姉さま…… 何で……」

レミリア 「なぜつて? 貴方の姉だからよ! D I O 百年程度しか生きていないガキが…… これ以上私の妹を傷つけるようならば、私が許さないわよ!」

D I O 「成る程では、辞めよう興冷めだ…… それとフラン貴様は、其処の姉と良く話すことだ、それにレミリア貴様も妹と良く話せ…… 私は、自室に戻る(これがレミリアの本気か…… 成る程今は勝てんな…… 今は)」

フラン 「お姉さま……」

レミリア 「フラン……」

D I O 「ふつ、またつく持って下らない話だな…… くつ! 全くこんな時に何だね
夜」

咲夜 「やはり、D I O 様いやD I O 貴方も止められるのね、時を……」

D I O 「そう言うことだがそれがどうした？」

咲夜 「そうね…… 貴方を殺すと言ったら？」

D I O 「殺れるのか貴様にこのD I Oをあこの程度の殺気でゲロを吐くほど怖がついてた貴様に？だが、私とて戦闘狂ではない…… そうだ咲夜さん友達になろうよ同じ能力を持つものどうし」

咲夜 「くっ、ふざけないで！やはりお前は、お嬢様にとっての障害となりうる存在だ、だから今此処で殺す！」

D I O 「全く此処の館の連中は、血の気が多くて仕方ない…… が良かろう同じ能力を持つ貴様の戦い方に興味があるのでな…… どれお相手願おうか！」

t o b e e c o n t i n u e . . .

第6話 止まった世界の中で

咲夜「喰らいなさい！幻符「殺人ドール」」

DIO「ふっ、ゆけ世界!!無駄無駄無駄ああ!どうしたのだ咲夜さん…… 貴方の實力はこんなものなのか」

咲夜「くっ、そんなわけないじゃない…… 本番はコレからよ 時符「プライベートスクウェア」」

DIO「ほう、この攻撃は今の体では喰らうべきではないな…… よかる咲夜さん貴方も体験するがいい我が世界の能力を」

DIO「ザ・ワールド時よとまれえ!!」
ブオオン……

DIO「さて…… 君も動いたらどうだね咲夜さん?」

咲夜「『咲夜の世界』…… さてあなたは何秒動けるのかしらそれじゃ今度は近接(コック)で殺りましようか?シツ」

DIO「くっ、(ギリギリ) 君のナイフを一本拝借しておいて正解だったよ……」

咲夜「(いつのまに……) さて…… あなた今何秒たったかご存知かしら」

D I O 「何！か、体が動かん…… 世界もだ……」

咲夜 「どうやらあなたが動けるのは…… 9秒のようね……」

D I O 「舐めるなよ…… このD I Oをおお」

シユ…… D I Oはほんの一瞬だけ動き咲夜の二の腕を切りつけた

咲夜 「痛いじゃない…… でも驚いたわ、少しだけでも動ける何て、でも乙女の肌を傷つけた罪は思いわよそれとコレは返してちょうだい」

そして咲夜がD I Oからナイフを奪いナイフをふるった時世界に咲夜の血が着いたのを咲夜は気が付かなかった……

咲夜 「これで終わりよ…… 幻葬「夜霧からの幻影殺人鬼」 銀符「シルバーバウン

ド」 傷魂「ソウルスカルプチュア」！D I O…… 貴方今青ざめたわね見えていることが逆に恐怖を与えているのね……」

D I O 「くっ…… (世界さえ動かせれば…… ん、この感覚は、まさかさっきのアレか) くっははははははは、やって見ろこのD I Oに対して!!」

咲夜 「あ、そうなら死になさい時は動き出す……」

D I O 「グギヤアアア」

咲夜 「これでいい…… これでお嬢様は守られた…… こちらも危なかった…… 私の止められる時間は戦闘中は20秒が限界しかもさっきので20秒きっかり使ったお

げで「今は10秒しか時も止められない…… さて行かなきゃねお嬢様にお茶を入れなければ…… なっ体が重い…… いや動かん!!」

D I O 「やはり貴様が動けるのは、そこまでのようだな…… そして、貴様の次のセリフは「貴様なぜ生きている」だ……」

咲夜 「貴様なぜ生きている…… ハー！」

D I O 「私が時を止めた20秒の時点でなそして脱出することができた……」

咲夜 「だが、なぜ貴様が動ける？」

D I O 「私にも良くわからんが貴様の血がこの世界に着いた時にこの世界は…… 更に時を止めることができるそして今時を止めて15秒が経過したそしてまだ止めていられる実感がある…… だが貴様をリタイアされるのに一秒もかからん」

咲夜 「くっ、（嗚呼、お嬢様申し訳ありません咲夜は、ここでお別れです……）」

D I O 「ふんっ！」

バキッ

咲夜 「え…… 生きてる？」

D I O 「勘違いするな…… これは英国紳士として当然のことだ…… （このD I Oがアイツのようなことを…… このD I Oが…… いやもうD I Oではないな）」

咲夜 「待ちなさい！D I O」

ディオ「オだ……」

咲夜「え？」

ディオ「ディオだ…… デイオ・ブランドー今度からはそう呼べ咲夜さん」

咲夜「私こそ咲夜つて気軽に読んで欲しいわね」

ディオ「ふっ…… 後で俺の所に来い……」

咲夜「あら、お誘いかしら？」

ディオ「くっ…… そんな訳なからう…… 同じ能力の持ち主同人ワインでもと思っただけだ…… それと乙女の肌を傷つけた事への謝罪も込めてだ…… だから勘違いするな……」

咲夜「わかったわ…… じゃあ後でねディオ」

キングクリムゾン!!

因みに夜中ワインを飲みながら夜中に熱く語りあつた二人だがDIOは、久しぶりのワインを飲みすぎて寝落ちした

レミリア「貴方達何があつたの？」

フラン「あー咲夜とDIO仲良さよう」

そしてなぜか咲夜がディオに抱きついてる

ディオ「改めて言おう私は、ディオ・ブランドーだよろしくそれと…… 咲夜朝から

聞いているがなぜ抱きついてる？」

咲夜「だって……ディオ貴方私の純血を奪ったじゃあないそれに昨日の夜はあんなに熱かったじゃない」

紅魔館一同（フランを除く）「「ぶっ!!」」

ディオ「なっ!?!」

こあ「熱く……激しく……ポ」

パチュリー「ケツホ、ケツホ……朝からお熱いわけね」

美鈴「咲夜さんもこれで大人のレディに……」

フラン「お姉様……純血ってなに？」

レミリア「ディオ……あんた覚悟出来てるんでしょうねええ!!」

ディオ「咲夜! 貴様覚えとけよ!!」

シュ

レミリア「あつ逃げた!! 待てゴラア!!」

そしてレミリアとディオが去った後

パチュリー「咲夜貴方どうしたの……あんな嘘ついて」

咲夜「パチュリー様……実は私病にかかってしまいました」

フラン「咲夜、大丈夫なの!」

美鈴 「妹様大丈夫ですよ……病は、病でも恋の病ですから……」
フラン 「恋の病……？」

t o b e e c o n t i n u e

第7話 波紋疾走

ディオ「なぜだ……」

ディオは、紅魔館の門の前で自問自答を繰り返していた……

美鈴「ディオさん、咲夜さんがすいません。でも咲夜さんも悪気があった訳じゃないんですよ……」

ディオ「くっ、咲夜め後で覚えておけよ……」

美鈴「まあまあ、ディオさん落ち着いて下さいって……でも流石にお嬢様にも驚きませんでしたよ……まさかあのままディオさんを捕まえて館の外に放り出してそこで反省してなさい獣何て、言っただけで館に戻って行くんですから……」

ディオは、前回の終わりで咲夜の嘘を信じてレミリア（ブチギレ）によつて館から追い出されていた……

ディオ「全くだ、ヤツは疑うということを知らないのか……」

美鈴「まあ咲夜さんは、お嬢様にとつて従者であり家族ですからね……もちろん私達もそうですよ」

ディオ「ふっカリスマが聞いて呆れるな……」

美鈴「あはは……」

ディオ「此処にいてもどうにもならん、少し館の周りを見てくる……」

美鈴「了解しました。ディオさんなら大丈夫だと思いますが妖怪などにはお気を付けて……」

ディオ「このディオを舐めるなよ……では行ってくる（それにこの間の戦闘で進化した世界の能力を確めねば）」

そしてディオが茂みに入って行きほとんど森の奥地とも言える場所へ行くと……

妖怪A「ギシャアアア……」

妖怪B「グルルウ……」

妖怪HM? 「プルプル……プルプル」

ディオ「これが妖怪か…… どう見ても雑魚だな、しかし光栄に思え貴様らはこのディオの世界の実験台に成れるのだからな……」

ディオは、獣の妖怪二匹と銀色の光沢ある液体のような妖怪? の計三匹の妖怪と対峙していた…… それを木の影から覗く人物が……

?? 「あれは…… 人間、だけどあれは…… 幽波紋?」

ディオ「では…… さっそくやらせて貰おうか…… ザ・ワールド 生まれい時よお!!」
ブオオン

世界が黄色っぽくなる

ディオ「やはりそうだ…… やはり止めていられる時が延びている…… そうなるとやはり咲夜の血に我が世界に何らかの影響を与えたとは思えんな…… やはり同じ能力を持つことにも関係がありそうだな、さてそろそろだな今止められる時は、21秒と言った読む所か…… では止めだ」

そうしてディオは、世界で妖怪達?を殴って行くだが……

ディオ「むっ、一匹だけ硬い!!しかし時間だ…… 時は動き出す……」
スウウ

妖怪A、B「!?」

妖怪HM「ビクン!」

??「な!一瞬にして妖怪が…… ならばやはりあれは、幽波紋使い」

妖怪HMは逃げ出した

ザツザツザツ……

しかし回り込まれてしまった。

ディオ「これで終わりだ…… ザ・ワールド時よとまれえ!!」

ブオオン

ディオ「行け、世界!!無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ああぶつ壊れ

ろおお!!」

世界「無駄ああ」

ディオ「そして時は、動き出す……」

妖怪達を倒した……ディオに○○の経験値ディオはレベ（殴

そして妖怪達を倒したディオは、不意に倒れかけた

ディオ「くっ……この体での連続使用は、負担がかかるのか……それともまだ新たな力に対応しきれていないだけか？」

そんなタイミングで先ほどのボスと思える大きな妖怪が出てきた……

ディオ「くっ……しまった……」

そこでディオの意識が落ちかけるその時

??「山吹色波紋疾走!!」

何者かが、その妖怪を葬ったあの男と同じセリフを言いながら……

ディオ「なっ、まさか……」

そこでディオは気絶した……

t o b e e c o n t i n u e ……